

「親子で巡る国立印刷局東京工場見学会」

一般社団法人日本麻酔科医会連合事務局長 森田 潔

日本麻酔科医会連合が主催する「親子で巡る社会見学会」が、昨年の赤坂迎賓館に続き、今年は令和7年8月26日（火）に国立印刷局東京工場で開催されました。今年は平日、猛暑の中での開催とあって、残念ながら参加者数は限られていましたが、他の団体も含めて30人ほどの親子がこの見学会に参加しました。

まず、国立印刷局とは、日本の社会基盤を支える日本銀行券（お札）、旅券などを日本国民に確実に提供する使命を持っており、日本経済と国民生活の安定に貢献している実感を感じ取ることができました。当然のことでしたが、想像以上のセキュアリティーで、東京工場の敷地内に入るにもチェックが厳しく、職員の規律も非常に高いレベルにあることを感じました。

国立印刷局は明治四年（1871年）に大蔵省紙幣司として創設され、以後150年にわたり、日本の紙幣を世界に誇る技術と信頼をもって安定的に供給してきました。信頼される紙幣の基本は、1. 偽造されず紙幣の価値を保つ、2. 物理的にも精神的にも使いやすいこと、（2千円札は失敗でした。）3. すべての紙幣が同じ品質で均一であることで、それを満たす印刷局の技術は、予想をはるかに超えるものでした。驚くことに紙幣の原図作成や肖像彫刻は、すべて工芸官という高度の専門職員によって精密に描かれ、また金属板に点や線を一本一本刻み込んで紙幣の原板が作成されています。このAIの時代、デジタルは補助作業でありました。



私は、中国、北京でも仕事をしていますが、中国では現在、紙幣を使用している人は全く存在せず、私もこの数年、中国で現金をもって歩いたことはありません。中国では、IT化が急速に進み、紙幣は、ほとんど流通していません。中国紙幣の最高額は100元札（約2000円）であり、日本の紙幣とは異なり偽造は容易にできそうな雰囲気です。おそらく、日本で電子マネーの使用率が上がらない原因は、日本のこの高度な技術で作られた紙幣に対する信頼度、安心感の高さからくるものではないかと思います。



ガラス越しではありますが、1万円紙幣を印刷する現場を見学しましたが、一束1億円の紙幣が山をなして存在し、お金とは感じさせないただの紙の山のように感じられますが、それを厳重にチェックし、ひとたびこの部屋を出ると、何百億という価値を生じる、不思議な感覚でありました。部屋から出る際には、すべての紙幣には通し番号がついており、一枚たりとも同じ紙幣は存在しないとのことでした。



今回の医会連合主催の社会勉強会「親子で巡る国立印刷局東京工場見学会」は、私たち親にとっても、子供にとっても、現場でしか得られない素晴らしい体験でありました。来年の夏休みにもまた、計画をしておりますので、是非、多くの皆様の参加を期待しております。